

戦争というものは

神河町立神河中学校二年（当時学年） 黒田 万葉

私が小学六年生の頃、初めて戦争という歴史を授業で学んだ。私の祖父は昭和十六年生まれの戦争経験者だった。良い機会だと思つて、話を少し聞いてみようと思ひ、軽い気持ちで声を掛けた。祖父は私の家のすぐ隣に住んでいたが、年もだいぶ離れていたため、あまり話す機会がなかった。だからなのか、よく語る祖父がとても新鮮で、その時の事を鮮明に覚えている。

「おじいちゃん、戦争の時の事を覚えている？」

私は初めにこの質問した。祖父は少し驚いた顔を見せた。きっと、私からこんな質問を投げかけられるとは思つていなかったのだらう。祖父は一呼吸おいて、

「所々だが覚えてる。」

祖父は小さい頃、満州国にいた時期があったという。満州国というのは、簡単に言えば、日本が領土と利益を広げるために作った国家であり、現在の中国東北部に存在していた国である。祖父は満州国にいた頃の事をたくさん話してくれた。

祖父がいた地域では、寒さがとても厳しかったらしく、大きな氷柱が二重になっていた窓の前に連なっていたそうだ。祖父はまだ小さかったので、周りにいた兵隊さんたちにたくさん遊んでもらい、面倒を見てもらっていたらしく、みんなで囲炉裏を囲み、たわいもない会話をして寒さをしのいだり、少し冷めた湯に入つて疲れをとったりするところが当時の楽しみだったそうだ。私の住むこの町からも、たくさん満州国へ行き、亡くなった方も少なくはないという。良くしてもうった兵隊さんたちも、だんだんと姿を見かけなくなつてしまつたらしい。祖父は誰かの顔を一人一人思い出すかのように話していた。「私の住む町からも」という事は、昨日すれ違つたおばあさんも、いつも挨拶をしてくれるおじいさんも、祖

父のように悲しく、淋しい思いをしていたのではないかと、ふと考えてしまった。身近にそのような人たちがいるとは、今まで気づかなかつた自分を少しだけ情けないと思つた。

その後も祖父は、自分の小さい頃の話をよくしてくれたが、どこか淋しそうな表情だった。私には、祖父がどれだけの思いを持つて生きて来たのか、どれだけの思いを持ってこの話をしてくれたのかは分からない。けれど、日本が戦争を経験した国であり、今も傷を負つて苦しんでいる人がいるということを忘れてはいけないと思つ。そして、その歴史を繰り返さないためにも、私たちが後世に戦争の辛さ、悲惨さを伝えていかなければならないと思つ。

今、世界では戦争や紛争をしている国が数えきれないほどある。皆さんも、ニュースや新聞で一度は見かけたことがあるのではないだろうか。夫を亡くして泣き叫ぶ妻の姿を、多くの身元不明の遺体の中から戦場へでた息子の遺体を一生懸命探す親の姿を、帰る場所がなくなつた私たちと同年代の子どもの姿を見て、あなたはどつ思つだろうか。私は少なくとも、こんなに惨いことがあつてはならないと思つ。家族や友人が死んでも、国のために戦つて死んだのだから「素晴らしいことだ」と言われる世の中に、人の命よりも国が重要視される世の中になって良いのだろうか。

私はこの人権作文を書きながら、戦争というものが、どれだけの人の人生を奪つのか、どれだけの人に傷を負わせるのかを考えた。そして、「戦争はダメだ」と主張する人が一人いるだけでは何も変わらないということも分かつた。世界の人々が平和に暮らすためには、戦争の原因を深く理解し、動くことのできる人たちが力を合わせて立ち向かつていかなければいけないのだと思つ。その中の一人に私はなりたい。

【二〇二五年度 第二十号

神河町人権文集「かみかわの子」より】

～ 8月は「人権文化をすすめる県民運動」推進強調月間です ～

兵庫県では、すべての人の人権が尊重され、年齢や性別、障がいの有無、国籍などに関わりなく、一人一人の個性が大切にされる社会の実現をめざしています。

そのためには、「共生の心」を培う人権意識の高揚を進め、一人一人が相手の気持ちや立場を理解し、思いやる感性を磨いていくことが大切です。

お互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活のなかで人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざして、8月をその推進強調月間と定め、さまざまな啓発活動を展開しています。